かわらばん
河原版

調布の自然で遊ぶ
野川で遊ぶまちづくりの会
代表　尾辻　03-3326-8285
編集　四方田　0424-80-4640
第9号　1994年 6月発行

遊びと仕事

本木　伸太郎

沖縄本島の西の“ナハ”から船で1時間ほどの慶良間列島は世界のサンゴ礁の中でも魚の種類の多さでは三本指に入ると言われています。初めてここの海をシュノーケルを使ってみせると50過ぎの人間が我を忘れて子供のように遊びまくります。たいていの人は2～3分水に顔をつけているだけでガバッと顔をあげ、はじけるような高笑いをするのです。未知の目を見張る情景がつぎつぎと五感を通して伝わってくるのが大きな感動となって表れるのでしょう。

都会を離れるとさまざまな遊びがある事に気付きます。群馬の山中、上野村で魚のつかみ取りに参加させて頂いた時の事です。地元の人と都会の人、子供から年寄りまで300人ほども集まったでしょうか。川の支流をせき止めて数百匹のマス、イワナ、ウナギなどが放されました。大喚声と共に方々で水しぶきが上り、やがて静かになると、たくさん取った人とほとんどとれなかったグループにはっきり別れているのに気付きました。

都会の人達とみられる親子づれなどはまずほとんど服装がよごれていません。頑張った人でもせいぜい一匹か二匹の獲物です。一方、地元のお年寄りは頭からずぶ濡れで手元のバケツははみ出さんばかりの魚でいっぱいです。宿の向いの70過ぎのおばーちゃんは七匹取ったと言っていましたが、浅い所に座り込んで足を開げてスカートの中に入ってくる魚を夢中で追い回していました。地元の人達は子供も大人も「あー面白かった」というような顔つきでありました。ここの人達は大人が子供のように遊ぶのが私には印象的でした。

沖縄の石垣島での常宿は“糸満”と呼ばれる漁師町の一角で目の前は舟寄せ場であります。ここで小魚を釣っていた時のこと、小学3年生位の男の子が3人そばに来て興味深げに私の顔と釣糸を見くらべているのです。これが釣れないのです。「君やってみる？」と竿を手渡すと自分で餌をつけ直し糸を垂れたとたん「ピッ」と一匹釣り上げたのです。驚いて見ていると30分ほどで、50匹ほど釣りました。他の2人の男の子の話では、彼は海人になる事が決まっているそうで、海での遊びは将来の仕事と直結しているらしい。

余談ですが、慶良間の民宿「爺っちゃん」は戦後船に機関銃をすえて台湾と本土の間で密輸をした猛者で「一航海で家3軒建つほど荒稼ぎしたけど全部パーッと使ったよ、人生遊び遊び」と言われた。今は海を守るため「ホテルは建てさせん」と先頭に立って頑張っているはず、時々無性に会いたくなります。

野川を歩いて

平林　春樹

４月１０日（日）、「野川で遊ぶまちづくりの会」主催の「野川に春の草花をたずねて」という観察会に同行し、国分寺駅から調布の深大寺まで約９Ｋｍを歩いてみた。

野川は、上流の方はコンクリート溝を流れていて、とても川とは呼べない状態であるのにまず驚く。訪ねる前は下流より源流の付近こそ、植物が豊富ではないかと想像したものだが、この期待は全く裏切られたのである。

小金井新橋あたりで漸く川辺に降りることができた。しかし、野川は完全に人工的環境の中に置かれている。両岸は護岸工事が施され、川辺の土は平らに削られ、草も刈られている形跡がある。このような人間臭さのある所には、雑草しか生えない。山野に自生する山草・野草はほとんど生えない。つまり雑草とは、人間がつくった田畑や造成地、空地やゴミ捨て場、堤防や河川敷、高速道路や鉄道の沿線といった人為環境にだけ生える草を指していう。この雑草の中には、もとからあった在来種のほかに、主として明治以降、外国から渡来してすみついた帰化植物も含まれる。都会の中を流れる川の岸辺は帰化植物の宝庫のひとつである。

そこでこの日は主として帰化植物に注目してみた。開花中の帰化植物を挙げると次のようなものである。セイヨウタンポポ（ヨーロッパ原産、キク科）、ハルジオン（北米東部原産、キク科）、ヒメオドリコソウ（ヨーロッパ・小アジア原産、シソ科）、オオイヌノフグリ、タチイヌノフグリ（以上ヨーロッパ原産、ゴマノハグサ科）、オランダガラシ（クレソン、ヨーロッパ原産、アブラナ科）、ハナダイコン（中国原産、アブラナ科）。日がたつと開花する種類がもっと増えると思うが、予想よりも帰化植物は少なかった。

図の出典：改訂増補 牧野新日本植物図鑑 北隆館 1989.

一方、在来種としては次のようなものが見られた。カントウタンポポ、ハハコグサ、ハルノゲシ（以上キク科）、トキワハゼ、ムラサキサギゴケ（以上ゴマノハグサ科）、カキオドシ、ホトケノザ（以上シソ科）、ヤエムグラ（アカネ科）、タチツボスミレ、フモトスミレ（以上スミレ科）、カタバミ（カタバミ科）、カラスノエンドウ、スズメノエンドウ（以上マメ科）、ヘビイチゴ（バラ科）、タネツケバナ、ナズナ（以上アブラナ科）、ムラサキケマン（ケシ科）、ケキツネノボタン（キンポウゲ科）、イノモトソウ（シダ植物）、ホウライシダ（シダ植物、栽培されていたものが逸出したものと思われる）などである。　同じ場所を季節をかえて、夏や秋に見て歩くと、春とは違う別な雑草が観察できる。こうして継続観察した結果から帰化率を算出してみるのもひとつのまとめ方である。帰化率とは、ある地区や地域に生育する植物（ふつう、花を咲かせ種子をつくる種子植物を指す）の中で占める帰化植物の割合（種類の百分率）をいう。この帰化率は環境が開発・攪乱されている度合を示すひとつの指標となり、帰化率が高い場所ほど環境がこわされているとみることができる。私が1991年から翌年にかけて、多摩川の河原で調べた数値を例にとると、京王線聖蹟桜ケ丘駅付近では約４６％であった。下流に下がる程、つまり都市化が進んでいるところ程、帰化率は高くなる。都区内の市街地や住宅地では平均して８０％に達するであろうという推定すらある。

ただし、私は雑草とか帰化植物を目のかたきにしているわけではない。むしろその逆で、例えば野川にも多摩川にも、もっといろいろな雑草が生えてほしいと思っている。彼等の一種一種がかけ替えのない生物界の一員である。雑草も生えないような川にしてはならないのである。

今日一日、野川を歩いて感じたことは、川の水と土とをコンクリートによって切り離してはならないのではないかということである。土は水と接することで生きられる。土が生きて植物も生きられる。水と切り離された土は死に、土が死ねば植物も死ぬ。河川対策は、治水とともに治土をも考慮する必要があると思う。

終りに、「野川で遊ぶまちづくりの会」の尾辻さんはじめ、参加された方々の熱意が実りあるものにならんことを祈ります。

野川を歩いて

永瀬 令子

その朝、川口市から駆けつけて集合場所には間に合わなかった。それでも最初の見学は近くだったので、すぐに追いつくことができた。都立殿ケ谷戸公園のそのひっそりとした佇まいと静けさは、将来の初老夫婦の散歩にはうってつけであると思った。それ程、整備された緑と自然の緑とが美しく混ざり合って、小じんまりとまとまっていた。

それからしばらく車道に沿って歩いて、ようやく着いたのは真姿の池。野川の源が、この地にあることを初めて知った。この目で確認できたのは、小さな神社の脇にある素朴な湧水の流れであった。周辺は、武蔵野の雰囲気が充分にあった。鯉のいる流れと水草を目で楽しみながら細い道を辿ってゆくと、武蔵国分寺が日曜市で賑わっていた。道すがら農家の野菜が売りに出ていて新鮮だった。まるで買い物ツアーに参加している如く、ビニール袋がどんどん増え、持つ手がみるまに重くなった。やっぱり主婦は忙しい。それでも負けじと万葉植物園の草木を観賞し、ちょうどお釈迦様の生誕祭りをやっていたので、甘茶をいただき、小さな釈迦像にお水をかけてお参りをした。ついでに見知らぬ方に写真を撮ってもらい、送ってもらう約束まで果たした。その後、お鷹の道に入り、素人では見つけにくいコースにやっぱり参加してよかったと思った。それから長い長い住宅街の道に入り、家々の庭木を楽しみながら、子供達だけがどんどん集団の最後尾にかたまっていった。とうとうお昼迄にはくじら山に辿り着けず、ちょっと手前の川べりでようやくお弁当を広げた。子供達は水遊びで疲れを癒した。小金井新橋より二枚橋まで野草の説明を聞きながらの川辺の散歩は、ゆったりととても楽しく、子供達も変身したように元気いっぱいだった。相変わらず遅れるのは、今度は遊びと観察とで忙しいためだった。いつのまにか野川公園を通り抜け、湿性花園のワサビ田で憩い、再び延々と周囲の景色を眺めながら、川に沿って歩き、大沢橋のあたりになると両足はただの歩く棒でした。子供達の“まだ？”“まだ？”の合唱を聞きながら、ようやく着いた“いこいの水辺”。あたりは桜並木と川辺に整備された彩りのよい花々。

「来年の花見は調布のおばあちゃんも誘って家族揃って」、夕暮れせまる中、計画する私の眼前に拡がる川の景色の現実は、ただひたすら大きなパノラマ写真の如くでした。いこいの水辺の実感は次の楽しみにしておき、体験しよう。皆さん、お疲れ様でした。お世話になりました。

カワニナをたべる
ホタルの幼虫

野川での驚き

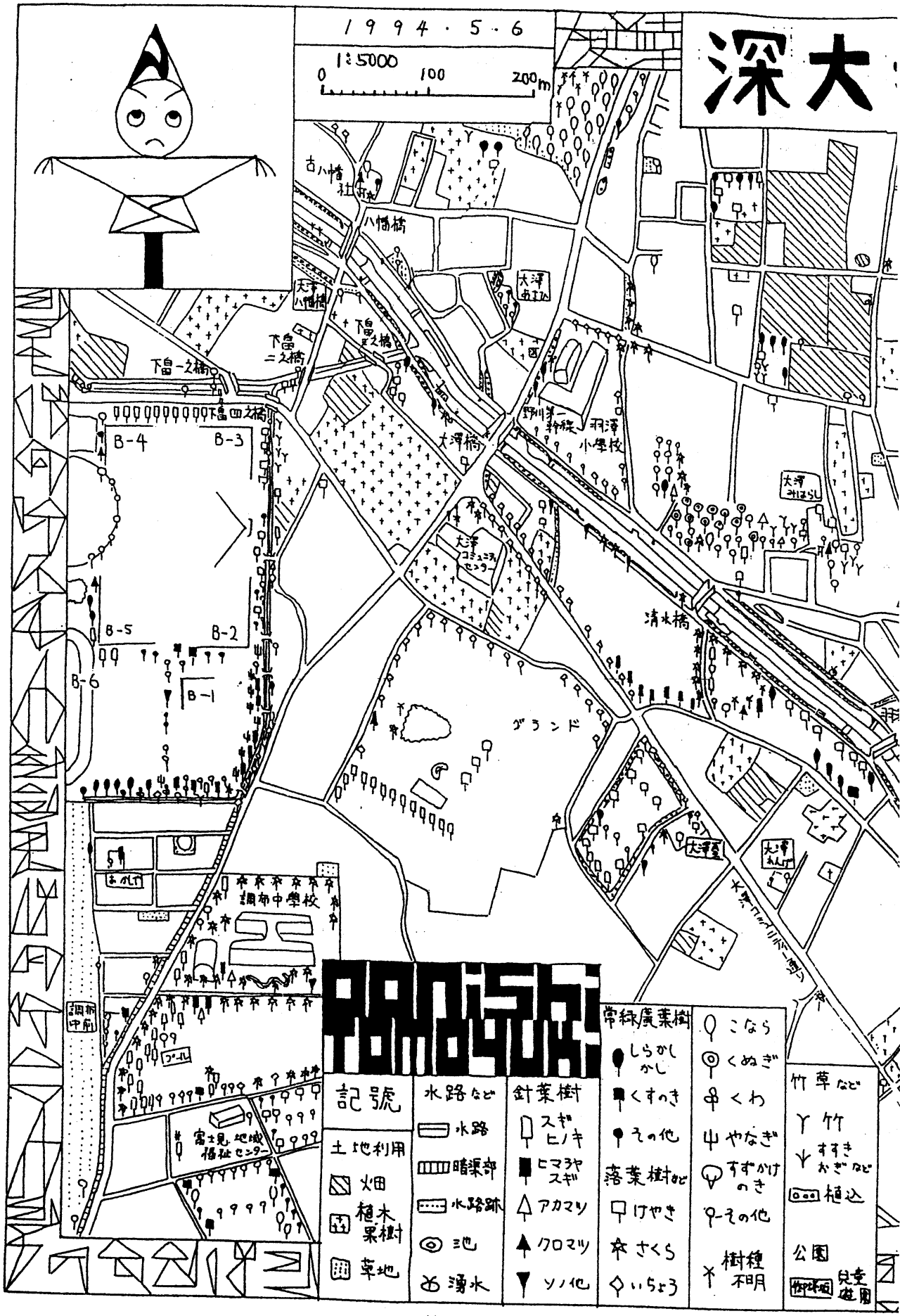
村田　幸夫

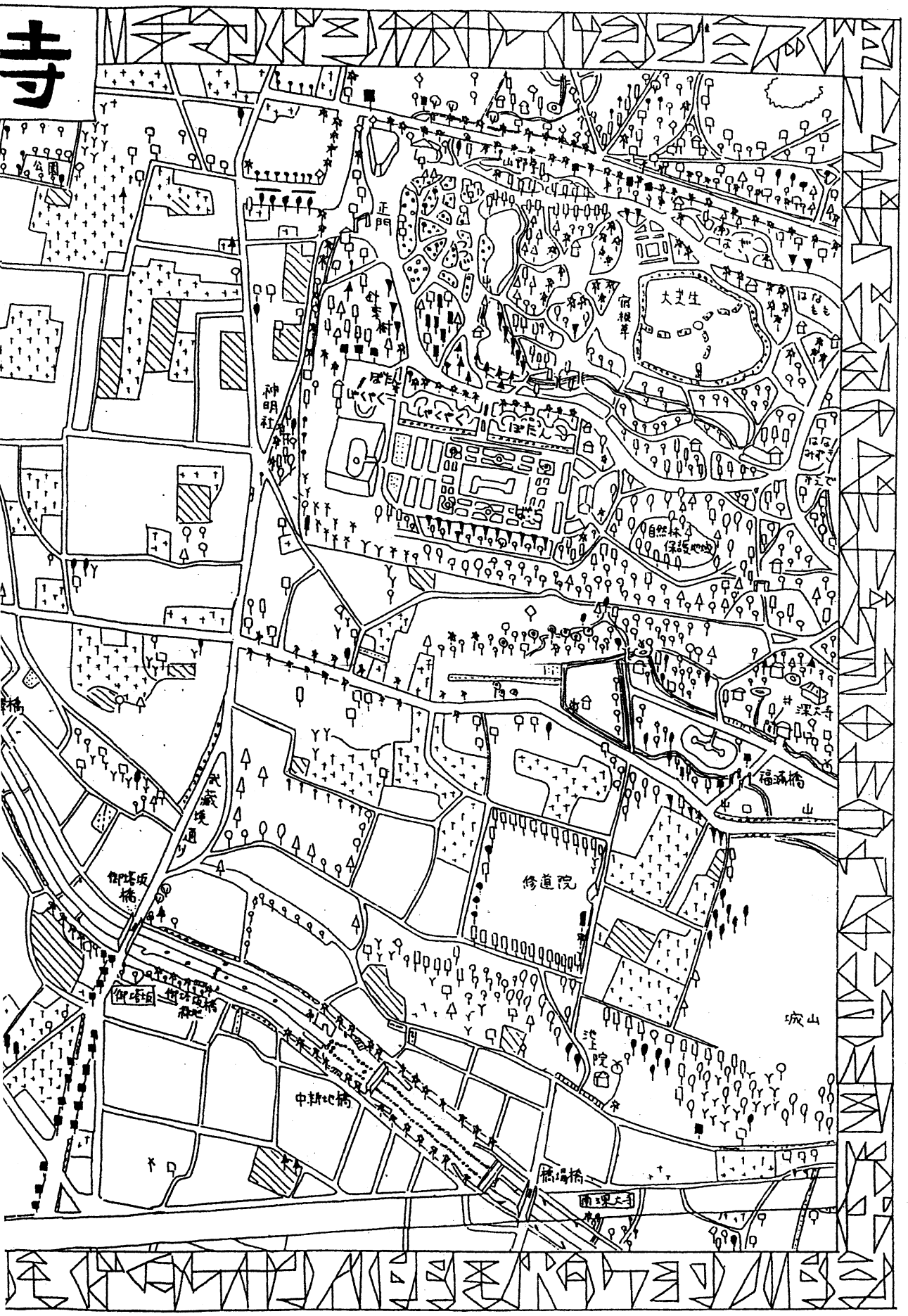
私が育ったところは住宅街で、緑もそんなになく、近くの川はいつもヘドロが浮いていて（今では工事をして、洪水にはならないようになったが・・）大雨が降るとすぐに氾濫してしまうような川でした。だから、はじめて野川を見たときは、都内の住宅街にもこんなに緑が多くて魚まで住めるくらい澄んだ水の川があるとは思ってもみませんでした。ましてや、子供が川の水辺で遊べるなんて信じられないことでした。

この野川の会で野川の源流から歩いたとき、少しずつしか水が湧いてこないからなのかどうかは知らないけど、上流の方で水が枯れてしまっているところがあり、本当に野川の源流なのかなぁという場所もありましたが水が湧きでている所は本当に水が澄んでおり飲料水を汲みにくるおじさんがいるほどでした。ほかにも、わさびを栽培していたり、水がきれいで餌が豊富でないと棲息できないという蛍の幼虫などまでいるのには驚きました。私にとって蛍の幼虫は見たこともないものであり、田舎でも減りつつあるというのにまさか都内に、しかも、今住んでいる家のそばにいるとは本当に驚きのなにものでもありませんでした。

驚きは良いことばかりではなく少し下流に行くと、途中何カ所か水が濁っているところがあったり、人が多いせいかよく見るとゴミも落ちてたりで自分が思っているほど野川の水はきれいではないのかもしれないと思い少しショックを受けました。やはり、いくら気を付けていても、人の多い都会では自然を守るということはとうてい無理かもしれないが、この野川の会でその不可能をを可能にしてほしいと思います。

最後に、本当は野川の野草の観察会だったのだけれども（野草の種類の多さにも驚いたが）それ以外の事での発見も多くあった事を良かったと思います。そして、野川がこのまま私の子供の世代になっても（決して、ヘドロが浮くことのない）驚きの野川、都会のオアシスであって欲しいと思います。


1994・5・6
1:5000
0
100
200m
深大
古八幡社
八幡橋
天満八幡橋
下畠一之橋
下畠二之橋
下畠三之橋
下畠四之橋
大澤橋
野川第一幹線
羽澤小學校
大澤あそび
大澤コミュニティセンター
大澤みはらし
清水橋
B-1
B-2
B-3
B-4
B-5
B-6
グランド
大澤堂
大澤あんず
調布中學校
調布中前
プール
富士見地域福祉センター
記號
土地利用
畑
植木果樹
草地
水路など
水路
暗渠部
水路跡
池
湧水
針葉樹
スギ
ヒノキ
ヒマラヤスギ
アカマツ
クロマツ
ソノ他
常緑廣葉樹
しらかし かし
くすのき
その他
落葉樹など
けやき
さくら
いちょう
こなら
くぬぎ
くわ
やなぎ
すずかけのき
その他
樹種不明
竹 草など
竹
すすき おぎなど
植込
公園
野球場
児童遊園


寺
公園
正門
山門
大丈生
宿根草
はなもも
神明社
ぼたん
自然林保護地区
深大寺
福源橋
武蔵境通り
御塔坂橋
修道院
坂山
渋院
中耕地橋
橋場橋
南深大寺

野川流域調査報告の概要①

大西友幸OONiSHi TOMOYUKi（大學２年　府中市　深小１１２期生）

「やれやれ　前のページはごちゃごちゃして讀みにくい文章じゃったが、今度のはちゃんとしたワープロ書きの文章じゃのう。」「ちょっと、さっきのは文章じゃなくて地圖でしょう。『深大寺』の地圖。」「どうりで讀めないと思ったわい」「でもあの地圖の作者がOONiSHi TOMOYUKiだってことは讀めたでしょう。」「ふむ。そんなのどこに描いてあるのじゃな。」「左下、記號説明の上。ちょっと讀みにくいけど。大西友幸って書いてあるんです。」

さて、前號の會報でお知らせした通り、僕は野川流域を調べています。調査の目的と方法とは、１．國分寺から世田谷に至る長くて廣大な野川流域を情報（統計・地圖など）で把握する際の枠組（深大寺・佐須といった地域、水質・下水道といったテーマ）を完成させ、２．その枠組に從って自分獨自の資料（地圖）を作成し、３．行政區單位や圖書館などでばらばらになっている情報をまとめる　ことです。ところが、やはり１年間では濟まない作業量であることがこれまでの圖書館での資料調査ではっきりしました。ここで、これからの調査進行の豫定を、優先順位を付けながら説明したいと思います。

先ず１．枠組完成を濟ませたいと思います。枠組が決まらないと後の調査がぐらぐらするからです。枠組を完成させるためには國分寺から世田谷までの資料を一通り見なくてはなりません。これがかなり時間がかかっています。しかし、調査の中心となる２．地圖作成ができなければどうしようもない（これだけは僕にしかできない）ので、調布周邊の調査報告は地圖が出來次第、多少の付屬資料の不備不足があっても報告書を出す豫定です。資料の補完は今年後半に行いたいと思います。そして、上流の方は地圖のみかわずかの資料のみで報告書を完結したいと思います。（もしかして地圖も描けないかも）

報告書１類（早期地圖・報告書作成。後、資料補完）

（１）佐須：橋場橋－おかね橋
（２）深大寺：榛澤橋－橋場橋
（３）柴崎：佐須の東、大町の北
（４）大町：おかね橋－高谷橋
（５）入間：入間川・野川合流付近

報告書２類（地圖のみ）

（１）野川公園：箭眞舳橋－相曾浦橋
（２）若葉：入間川
（３）仙川：調布市の仙川
（４）大澤：三鷹の野川
（５）前原：小金井の野川中流
（６）貫井：小金井の野川上流
（７）國分寺：國分寺の野川
（８）水源：元町用水、武藏臺公園など

１／５０００地圖「深大寺」の案内

神代植物公園の中は、みどりの日の無料開放の時に調べました（幸運！）。地圖畫面右半分は、はけの線は二段になっていますが地圖ではわかりません。北側は深大寺から西に延び南側は池上院から西に延びていて、二つが合うところは大澤みはらし兒童遊園です。大澤橋より少し上流で野川に合流する水路（下畠〇之橋がある水路）は、雨の時だけ水があります。ずっと逆上っていくと、府中の淺間山の湧水が水源だったそうです。今は調布飛行場のところまでしか水路は殘っておらず、一部に緑道がある程度です。大澤にはもうひとつ雨の時だけ流れる「川」＝野川第１幹線の排水口があります。

他にも１／５０００地圖「野川公園」「佐須あたりの地圖」が出来ています。

トンボの幼虫（ヤゴ）

用水路の清掃と生き物調査に参加して

アメンボ

田村　千恵美

朝、目が覚めてすぐ枕元のカーテンを引っ張った。「あっ、大丈夫。できる。できる。さぁ、お弁当つくるぞぉーっ。」

ちょっと危なげな曇り空ではあるけれど、前の晩（４月２３日土曜日）の天気予報では、夜半から午前中いっぱいは雨との事だったので、これは上出来。まずは、お天気に感謝。　二人の大人と二人の子供と二匹の猫の朝食終了。お弁当できた。軍手、持った。タオルとごみ入れのビニール袋も持った。汚れてもいい格好…これなら年中ＯＫ。長靴を履いて、さぁ出発。ワクワクしながら９時半にちょっと遅れて佐須児童館へとたどり着いた。

１０時を過ぎる頃から人数も増え、いよいよ用水路へと向かう。清掃する約５００メートルの範囲をざっと見ると、浅いとこあり、意外に深いとこあり。クレソン（大きく育ってちょっと違って見えるけれど）を見つけて嬉しくなった。水に入ったとき、その冷たさに「ああ、湧き水なんだなぁ。」と改めて感じ入った。

泥をかぶりながら横たわる車やバイクの部品、建材の破片を脇へと引き上げる。プラスティックの容器、発泡スチロールの小片、エコマークのついたビニール袋もある。どんなに小さくても、こういったごみは本当に“異物”、まったくの場違い。腹が立つような、情けないような気分になりながら拾い集めた。ただし、空き缶を拾うときはちょっと楽しみで、“ザリガニが棲み着いていることがある”のお言葉どおり、居る、居る。そのしたたかさが、何故かいじらしく、可愛いかった。果たして居心地はどうなのかなぁ？

清掃の後は、子供達お待ちかねの生き物調査だ。小金井市にお住まいで、環境調査の関係のお仕事をなさっている平井さんという方が、お話しをしてくださった。ご専門は水中のプランクトンというだけあって、小さな生き物達へのやさしい心遣いが印象的だった。　石を持ち上げたら、またそっと元どおりにしておくこと。水草を踏み付けないようにすること。採取ネットの使い方。言葉の端はしに命への配慮が感じられ、気をつけなくてはと自戒した。人間、一歩足を踏み出せば、山であろうが、川、海であろうが、そこに棲む多くの命を絶っている。そこはもともとその命達の場所なのだから、遊ばせてもらうときには絶対に守らなければならないルールがある。ましてやごみを捨てるなんて…。

平井さんが、採取した生物を説明してくれた。どじょう、ほとけどじょう、かわにな、やご、おけらの仲間、川えびもいた。平井さんによると、川えびやさわがにといった甲殻類がいる水は、きれいなよい水なのだそうだ。水はこべという植物も生えていたが、これもこの水のすばらしさを語っているそうである。とてもうれしいと同時に、微妙なバランスの上に立つ、これらの生物の未来を思うと何故か胸が重くもなる。守らなくては…。

この辺りで生まれ育った方によると、昔（といってもほんの数十年前）は、カニ山の横を清流が通り、そこで腹ばいになって滑って遊んだのだそうだ。もちろん豊富な湧き水にさわがにも群がるようにいて、カニ山は文字どおりの場所だった。そしてその清流の周りには緑の水田が広がっていたそうだ。美しい風景だったろうなぁー。しばし絶句。

もうこれ以上“～だった。”を増やさないため、出来ることは何でもしようと思う。それにしてもあのごみの中で気になるのは、ビニールの袋である。水にさらされて柔らかくなり、そこにうっすらと藻や泥がついたさまは、本当に海草のようであった。死んで陸に打ち寄せられた海がめの多くが、このビニール類を腹に詰まらせているという。もちろん海草を食するのは海がめだけではないのだから、その犠牲の大きさは計り知れない。やる瀬ないじゃないか、どうして人間だけがルールを守れないんだろう。ちょっと話が遠くに行き過ぎてしまったけれど、５００メートルの用水路はそれほど多くのことを訴えかけている。

あの生き物たちの用水路からもらった水で稲が育ち、実ったお米をいただいて私達の命がつながって行く。あっちも生きてこっちも生きる。有り難い、ありがたい。午後の米作りのミーティング前、麦がいっぱい混じったおにぎりを食べながら不思議な思いに浸っていた。

トンボと環境（IX）

～トンボ公園（その3）～

（上村　佳孝・高3）

調布付近の多摩川や野川で見られるトンボは、『川のトンボ』というよりは、大部分は『池のトンボ』です。一般に『池のトンボ』は汚染に強く、逆に『川のトンボ』や『湿地のトンボ』は繊細なようです。

幻のトンボになってしまったベッコウトンボをはじめとして、モートンイトトンボ、キイトトンボ、ハラビロトンボ、ハッチョウトンボなどは、『湿地のトンボ』ですが、これらのトンボを守ることは難しいことです。

これらのトンボは、水田や休耕田、あるいは自然の湿原などに生息していた種類ですが、水田は農薬汚染のために、休耕田は長年放置されると湿性遷移のために、湿原も造成や湿性遷移のために、彼等の生息地として、適さなくなりつつあります。

『湿性遷移』とは、湖や池が、土砂の堆積や、それを促す植物の繁茂により、次第に浅くなり、湿地を経由して、草原にまでなってしまうという、自然の作用の一種です。

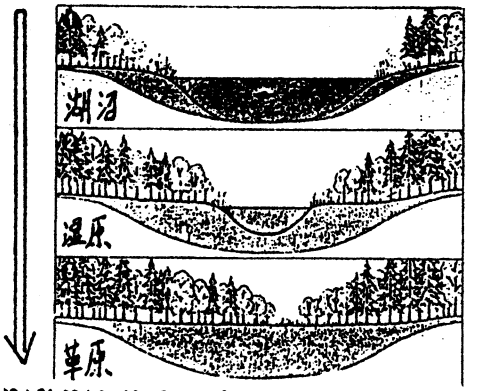
『湿地のトンボ』を守るためには、この自然の作用に逆らわなければならないのです。高知県中村のトンボ王国でも、過剰に繁茂した植物の除去は、大切な、そして大変な作業とされているようです。

ひょっとしたら、『湿地のトンボ』の中には、稲作文化の普及と共に、分布を拡大してきた種類があるかも知れません。水田のトンボの代表、アキアカネは、日本人の水田の発達と共に、分布を広げたといわれていることですし…。では、日本人が水田を捨てて、その結果、『湿地のトンボ』が減少することは、自然なことであり、日本人の罪ではないのでしょうか。少なくとも、稲の害虫であったら、だれも保護を叫ばないことでしょう。そうすると、これは昆虫差別の問題でしょうか。

なにやら倫理的な問題になってしまいましたが、僕が言いたいのは、『湿地のトンボが大変にキレイだ！』ということです。トンボのための環境を整えるならば、是非生息してほしいと思わせるトンボばかりです。いつの世も美人は得です。

湿性遷移

湖や沼などは，長い年月の間に土砂が堆積して浅くなり，しだいに湿原に変わる。さらに，植物の遺体や土砂が堆積して陸地化が進み，そこに草原ができるようになる。その後，低木林，高木林を経て陰樹林に変わるが，湖沼から始まる遷移を湿性遷移という。



田ンボ報告

大木　健次

5月8日（日）。今年も種モミをまきました。品種はアキタコマチ。去年まいた品種は、大家さんも勝手知ったる多摩地方在来のアキニシキ。今年アキタコマチをまくにあたって「肥料のやり方もよーく聞いといた方がいいですよ。」とは大家さん。なるべく丈夫な品種の方がいいな、とは思いつつも今年は独力で苗床づくりから田ンボを始めています。（去年苗床は大家さんが畑に準備してくれていました。）

田ンボの土もすぐ踏み固められてしまいそうな、圧倒的人力に恵まれて作業ははかどりました。大家さんにいわれた、アゼの削りもすぐ済みました。5ケ月眠ったカニ山の落ち葉による堆肥のバラまきと耕うん、苗床のまわりの水路掘りもすぐできました。

皆さん、ありがとうございました。

稲作全体からみればまだまだ準備段階ですが、「苗七分」ということわざもあるようです。丈夫な苗が育つよう、しっかりと見守ってゆきたいと思います。

去年1年、稲作をなぞったとはいえ、田ンボ班はシロウト。御意見、御忠告、御指導、御警告、御助力、……ありとあらゆる建設的御賛同をお待ち致しております。田ンボ班事務局でも専門家との交流、地元農家との交流、他団体（シロウト耕作団）との交流等の機会も設けるなど、どうせやるからには「ちゃんと」「しっかり」「心ゆくまで」そして「無理せず」「楽しく」やりたいと考えておりますので、よろしくお願いします。

［閑話休題］◆大家さん語録。

その1「ここの水路は昔はジャブジャブ水が流れていて、1年中野菜の水洗いにも使っていたし、甲州街道までズーっと田ンボでしたよ。」

その2「浄水場でボーリングをしてからガタっと水量が減ったんですよ。」

その3（大家さんの奥さん）「私の実家の方ではくろつけなんてしないんですよ。ここらは土がサラサラだから（くろつけをしなきゃいけないんです）。」

畑（田ンボ）は農家（プロ）の職場だァ！（私の言葉）

「遊ぶ会」活動メモ（１９９４年３月～５月）

３月１３日　田んぼの荒起し（１回目）

機械を使って半年間踏み固められていた地面を耕す。一面に草が生えていた田んぼが息を吹き返した感じになった。

３月２７日　堆肥の切り返し（２回目）

ほとんど臭いも消え、いい肥しができている。畦の草刈り、これでさっぱりした。

４月１０日　野川に春の草花を訪ねて（源流から調布へ）

好天に恵まれ、桐朋学園講師で自然保護に熱意のあふれる平林先生を迎え、大勢の参加者にとって心満たされた一日となった。四方田祐児君（３才）をはじめ子供達も１０キロの道を最後まで歩き通した。よく頑張ったなぁ。

４月２３日　荒起し（２回目）

鍬を使い除草も兼ねて行う。農業が草との闘いであるとの一面を痛感する。

４月２５日　佐須の用水路の清掃を兼ねた湧水の生き物調査

環境調査会社へお勤めで水辺の生き物が専門の平井さんの指導を受けながら行った。毎年１回この時期に行っているもので初めの頃に較べるとゴミの捨て場という感じではなくなってきている。以下にあげたものが観察できました。

（セキショウモ、カワエビ、ドジョウ、ヒゲラ、コカゲロウ、ミズハコベ、ミクリ、ヒメダカ、カワニナ、カワゲラ、オニヤンマのヤゴ、アメリカザリガニ）

４月２９日　苗床づくり

苗床の場所を決め、鍬で細かく耕し整地をした。

５月　７日　桧堂、佐須地域の昔を知る会

調布市民フォーラムの人達と合流して、昔に詳しい地元の方々の参加をえて昔の武蔵野の面影を残している桧堂、佐須地域を説明を受けながら散策し、農業高校での昼食会、楽しい１日でした。

５月　８日　田んぼの種蒔き

アキタコマチの種もみ（田中毛健一さんに分けていただいた）を５日に水つけしたものを種蒔き、苗床への水入れ、畦削り、堆肥をばら蒔き荒起し、子供達も大勢参加し作業したが、これまでの一連の農作業に参加している大木家、尾辻家、深沢家、四方田家やその他の子供達は他の子供達が味わえない貴重な経験をしていると思う。

５月２２日　田んぼを借りている竹内さんの畑で草取り

子供達は大きなミミズやクワガタや色々な虫（残念ながら名前を知らない）を見つけて大はしゃぎ。

（文責　依田）

［編集後記］

初めて春の草花を訪ねながら野川を散策しました。平林先生に草花の名前を教わると、とても雑草が身近に感じられます。帰ってから、自宅の前に生えている雑草をじっくりと観察しました。名前を覚えると不思議と親しみがわいてくるものですね。

「がんばれ都市農業」「会員紹介」はスペースの都合でお休みいたしました。（四方田）